

「自問自答形式の疑問表現」の性格

高 橋 淑 郎

キーワード

自問表現 独話 説明要求 判定要求 説明・解説

1 はじめに

言語表現のジャンルの文体，すなわち，ひとまとまりの言語表現の類型的な言語的特徴を明らかにするためには，特定の言語事象を指標として，対象となる言語表現と，それとは異なるジャンルの言語表現とを比較する方法が有効である⁽¹⁾。

たとえば疑問表現を指標として考えてみると，日常会話やインタビューのようなやりとりのある言語表現では量・種類ともに多く使われ，逆に，独話の話しことば⁽²⁾や文章ではほとんど使われないことが予想される。そしてその結果から，会話とそれ以外のジャンルとの言語的性格の違いが記述・説明できるように思われる。

ところが実際の使用例を見ると，講義・講演やスピーチ，説明的文章でも疑問表現は使われている⁽³⁾。

- (1) 先週までの，講義の内容を，ざっと振り返りますと… (略) …
で，今週からは，どういう勉強をするのか，っていうと，{2つの変数を同時に取り上げて分析する方法について勉強していきます}。

【講A】⁽⁴⁾

(2) では、エイハブは何故このような世界観を持つに至ったのであろうか。【論C】

(1)(2)いずれの例も、疑問表現の後でその疑問に対する答えが示されている。こうしたタイプの疑問表現は、相手（表現主体から見た受容主体）に問いかけて答えを求めるのではなく、自分で疑問を投げかけ自分でそれに答えるという意味で、「自問自答形式の疑問表現」と言えるだろう。本来、相手に対するなんらかの働きかけの性質を持つと考えられる疑問表現が、このように一方的な伝達形態の独話や文章でも使われるのはなぜだろうか。

この疑問に答えるために、本稿では、こうした自問自答形式の疑問表現がどのような性格を持つ表現なのかについて考察する。第2節で自問自答の疑問表現がいわゆる典型的な疑問表現とどう違うのかを簡単に整理し、本稿なりの定義を示した後、講義や論文などでも使われることを確認する。そして第3節では答えの表現との関係の検討、疑問表現を用いない場合との比較を通して、この表現の性格を考察する。

2 自問自答形式の疑問表現の規定

2.1 疑問表現としての位置づけ

典型的な疑問表現を、「表現主体がなんらかの疑問を抱き、それを解消

表1 疑問表現の分類

		答 え	
		相手が答える	自分が答える
疑問	自分に疑問がある	(a)典型的疑問表現	(b)自問自答が言語化した表現
	自分に疑問がない	(c)クイズ質問 ・テスト質問など	(d)〈自問表現〉 ⁽⁷⁾

することを志向して受容主体にそれを問いかけ、受容主体がそれに答える、
という場合に用いられる疑問表現」と考えると、自問自答形式の疑問表現
は、①表現主体が疑問を抱かない、②表現主体が自分で答える、という2
点に特徴がある。①の点については「クイズ質問・テスト質問」⁽⁵⁾等と共
通点を持ち、②の点で本来の意味でのいわゆる「自問自答」が言語化した
表現⁽⁶⁾と共通点を持つ（表1参照）。

これまでの研究は(a)の典型的疑問表現に焦点をあてたものが大部分で、
(b)以下のタイプに注目したものはあまり見られない⁽⁸⁾。本稿では、ジャン
ルの文体研究の立場から、独話にとくによく見られる(d)に注目している。

2.2 〈自問表現〉の定義

〈自問表現〉は次のように定義することができる。

「〈自問表現〉とは、疑問表現のうち、疑問表現の表現主体と同一の表現
主体による答えの表現のあるものである（「答えの表現」は含まない）。」

疑問表現の定義は宮地裕（1980）にならう。すなわち、次の1つ以上を
満たせば疑問表現とする。

- 1 文末に特定の助辞「か」を添える。
- 2 文中に疑問詞を用いる。
- 3 文末の音調を上げる。表記に際して疑問符を文末に付けることもあ
る。

ただし、「～と（て）言う（と言います）」「～と（て）言えば（言っ
たら）」などに導かれる従属節でも、対応する答えの表現がある場合は
〈自問表現〉とする。冒頭の(1)や次の(3)のようなものである。

- (3) エイハブをたとえば、日本人の代表として考えられるかって言う
と、{どうもずいぶん違うだろうと}。【講C】

一方、次の(4)のようなものは、形式上独立した疑問表現であり対応す

る答えの表現もあるが〈自問表現〉とはしない。疑問表現の表現主体と当の言語表現（論文E）の表現主体とが異なる時点におけるものだからである。この例における疑問表現とその答えとのペアは、一種の引用であり、疑問表現の表現主体は引用された時点においては本当に疑問を感じている（本来の意味での「自問自答」が言語化した表現である）と判断される。

- (4) そんなことを考えながら、ある日ぶらぶら、渋谷の道玄坂を歩いてきますと——なんと、私の知らぬまに、はやばやとでっかい広告の看板まで出ているではないか。…（略）……どうしてこんなところに、レヴィ＝ストロースの広告がでているんだろ。 {そうか、ボクの知らないうちに、世の中は意外に進んでいるのかもしれない}。／だがなんのことはない、実はジーンズの広告を、構造主義の宣伝かと早とちりしただけでした。【論E】

2.3 ジャンルごとの使われ方

「雑談」「インタビュー」「討論」「講義」「論文」の言語表現⁽⁹⁾を対象に〈自問表現〉の出現頻度を調査したところ、表2のようになり、文章や、講義のような独話でよく使われることが確認できた。頻度は、〈自問表現〉の出現度数をその言語表現全体の文字数（雑談・インタビュー・討論は表現主体ごとの文字数）で割ったものを一万倍したものである（小数点第2位以下切り捨て）。雑談・インタビュー・討論で複数行あるのは表現主体ごとに分けたためである。

用例数が少なく、また、分母となる文字数もそろっていないので出現頻度の数値の信頼性は高くないが、講義・論文に比べると雑談・インタビュー・討論とも出現頻度が安定してかなり低いという傾向が見て取れる⁽¹⁰⁾。逆に言うと、講義・論文で使われやすく、とくに講義というジャンルに特有の表現であるように思われる。

それでは、〈自問表現〉とはどのような性格の表現なのか、なぜ独話や

文章で使われやすいのかについて以下で考察する。

3 〈自問表現〉の性格

2.1節で見たように〈自問表現〉は、①表現主体に疑問がない、②自分で答える、という点で典型的な疑問表現とは異なるのだが、この2点はそのまま、〈自問表現〉の性格をとらえる手がかりでもある。①からは「なぜ表現主体に疑問がないのに疑問表現を用いるのか」という観点が、②からは「〈自問表現〉と答えの表現とはどのような関係にあるのか」という観点が導き出せる。3.1節では後者の観点から、3.2節では前者の観点から〈自問表現〉の性格を考察する。

3.1 〈自問表現〉と答えの表現との関係

疑問表現と答えの表現との関係については、従来から指摘されている「説明要求」「判定要求」という観点到に注目する。「説明要求の疑問表現」は「だれ?」のように文全体のある判断を前提としてその細部にわたる説明をもとめる疑問表現、「判定要求の疑問表現」は「あした、きみは学校へ来る?」のように文全体の判断が成立するか否かを問う疑問表現で

表2 〈自問表現〉の資料別出現頻度

	度数	文字数	頻度
雑A	1	6200	1.6
	0	5080	—
雑B	0	5120	—
	0	3020	—
イA	0	7240	—
	0	2390	—
イB	2	20040	0.9
	0	9520	—
討A	1	4000	2.5
	1	5280	1.8
	7	9720	7.2
	0	1280	—
討B	1	4240	2.3
	0	2880	—
	0	1800	—
	0	1830	—
	0	1150	—
講A	32	16680	19.1
講B	20	21520	9.2
講C	20	22400	8.9
論A	8	22300	3.5
論B	1	27670	0.3
論C	3	15390	1.9
論D	34	22100	15.3
論E	7	11970	5.8

ある（宮地(1979), pp.76-77). この区別は、疑問表現がどのような答えを求めるかの違いであり、答えの表現が疑問表現の問い方にきちんと対応していれば、要するに、疑問表現と答えの表現との関係についての分類である⁽¹¹⁾. 本稿では以下、この分類基準にしたがって考察していく⁽¹²⁾.

3.1.1 「説明要求」の〈自問表現〉と答えの表現

まず用例全体の分布を確認する. 〈自問表現〉全用例を「説明要求」「判定要求」に分けて数えると、全体の8割以上が「説明要求」となる（表3）. さらに、「説明要求」を疑問詞別に整理する（表4）と、上位3位までの「ナニ（述）」「ドウ」「ナゼ」の合計が91例で、これは「説明要求」の〈自問表現〉の78.4パーセント、〈自問表現〉全体の65.9パーセントを占める. このように、〈自問表現〉では限られたタイプが多用されていることが分かる.

さて、「確認要求」の〈自問表現〉とその答えの表現との関係について見ていく. 上位を占める「ナニ（述）」「ドウ」「ナゼ」からそれぞれ2つずつ例を挙げる.

表3 答えの表現との関係から見た〈自問表現〉

関 係	度 数	% ⁽¹³⁾
説 明 要 求	116	84.0
判 定 要 求	22	15.9
合 計	138	100

表4 「説明要求」の〈自問表現〉（疑問詞別）⁽¹⁴⁾

ナニ(述)	ドウ	ナゼ	ナニ(格)	ドコ	ドチラ	その他	合計
42	32	17	9	7	6	3	116

《ナニ (述)》

- (5) で、この、主題って、じゃ、じゃ、なんなんだと。と、 {簡単に
言っちゃうと、「人間と自然の戦い」なんだね}。【講C】

- (6) 因果関係とは何か？ 【論A (章見出し)】

いずれも「～とはナニか」という形式で使われる。(5)のように直後で語句ないし複数の文で答えが示されることもあれば、(6)のように一つの章をまるごと答えの表現とする場合もあるが、いずれも「主題は……である。」「因果関係とは……である。」と言い換えられるような意味関係にある。「主題は」「因果関係とは」は題目提示の表現であるから、これに相当する〈自問表現〉は題目提示の役割を果たしていると言える。

《ドウ》⁽¹⁵⁾

- (7) で、今週からは、どういう勉強をするのか、 っていうと、 {2つ
の変数を同時に取り上げて分析する方法について勉強していきま
す}。【講A】

- (8) 前のことと、いま言ったこととはどんな関係があるのだろうか。
【論D】

(7)(8)の〈自問表現〉もやはり題目提示をし、答えの表現がそれに対する説明を述べている。(8)に対応する答えはこのあと15文にわたって述べられている。

《ナゼ》

- (9) あれだよ、ブラジルがなんでサッカー強いかって言うと、 {ガキ
の頃からやってるからだよ}。【雑A】

- (10) こういうふうなその、臣従状態、君主とその、封臣との、そういうその関係っていうのは、このフリードリッヒ1世の時代にしても長くはその、続きません。で、なぜかって言えば、この、{フリードリッヒ1世の時代、ま、とりわけ、結局はその〔板書〕ドイツの皇帝にとってはその、イタリア問題っていうものが一番その一、重要なもんなんです。【講B】

(9)の〈自問表現〉も、たとえば「ブラジルがサッカーが強い理由は」のように言い換えられ、やはり題目提示をしていると考えられる。(10)は〈自問表現〉だけを見ると実質的内容がなく題目提示とするのは難しいように見えるが、「なぜか」の直前からの文脈をたどればここは「フリードリッヒ1世の時代でも臣従状態が長続きしない理由は」と言い換えられるので、やはり題目提示の働きをしていると考えてよいだろう。

以上をまとめると、「説明要求」の〈自問表現〉はどれも「題目提示」⁽¹⁶⁾の働きをしていると言え、答えの表現とともに、「x (と) はyである」という表現(「x」が「題目」、「yである」が「説明」)を構成している。いわば「説明・解説」の表現であり、そのために、ひとまとまりの内容の一方的な伝達形態の講義や論文で使われやすいのだと考えられる。

3.1.2 「判定要求」の〈自問表現〉と答えの表現

- (11) それで、あれを求めてね、また入って得られるかっていうと、
{もう、得られないんですよ、きっと}。【イA】
- (12) エイハブをたとえば、日本人の代表として考えられるかっていうと、
{どうも随分違うだろうと}。【講B】
- (13) で、しかし、5人でその、やるかって言えば {そうではなくて}、
この、騎士団というのはその、騎士団員はその、5人ですけれども

【講B】

いずれの例も、〈自問表現〉と答えの表現とをペアでまとめれば、結局、なんらかの判断を明示する表現と考えられる。(11)は「あれを求めてまた入ってももうきつと得られない」、(12)は「エイハブを日本人の代表として考えることはできない」、(13)は「5人でやるのではない」ということを言っている表現である。

このように、「判定要求」の〈自問表現〉と答えの表現のペアは、それぞれが「題目提示」「説明」といった単位に対応して総合的に「なにかについて述べる」表現を構成するのではなく、全体として「Aである（ではない）」（Aは命題・事柄・事態など）という表現を構成しているのである。

3.2 疑問表現を用いない表現との比較

つぎに、〈自問表現〉は表現主体に疑問がないのになぜ疑問表現を用いるのか、という観点から考察する。

3.1節では〈自問表現〉と答えの表現のペアは「説明要求」の場合は「x（と）はyである」という表現に、「判定要求」の場合は「Aである（ではない）」という表現に言い換え可能であることを見たが、疑問表現が用いられる理由については言及しなかった。ここでは言い換え表現との比較を手がかりにして〈自問表現〉の性格を見ていくことにする。

3.2.1 「説明要求」の場合

「x（と）はyである」と比較する。

- (14) で、なぜハンガリー王がその、追放するかって言えば、その、
 {トランシル、トランシルヴァニアに入ったドイツ騎士団は、この、
 ハンガリー王国からは別個の独立したその、国家っていうものをそ
 の、作ろうとするんですね}。【講B】

- (14') で、ハンガリー王がその、追放する理由は、その、{トランシル、
トランシルヴァニアに入ったドイツ騎士団は、この、ハンガリー王
国からは別個の独立したその、国家っていうものをその、作ろうと
するんですね}.

まずこの比較で分かるのは、疑問表現を使えば題目提示は「文」であるのに対し、疑問表現を用いない形式はふつうは「名詞句」になるということである。したがって、疑問表現を用いれば独立した文で題目提示をすることができるが、名詞句では（少なくとも地の文では）そういうことができない。次の(15')のような言い方は地の文としては違和感がある。もちろん、(15'')のように「～について述べる」等を後につければ名詞句も独立文で題目提示することができる。

- (15) では、エイハブは何故このような世界観を持つに至ったのである
うか。【論C】

- (15') エイハブがこのような世界観を持つに至った理由.

- (15'') エイハブがこのような世界観を持つに至った理由について述べ
る.

ここで次の相違点が明確になる。疑問表現を名詞句に言い換えると複雑で長い連体修飾になってしまう場合があるということである。

- (16) なぜ、こうした、それぞれの子供には、一応、相続領、相続可能
な、自分達の子供に順次相続していく領地を与えると同時に、なん
でこういうふうな、最年長公領、こういうものをその、設ける
か、って言えば【講B】

- (16') こうした、それぞれの子供には、一応、相続領、相続可能な、
自分達の子供に順次相続していく領地を与えると同時に、こういう
ふうな、最年長公領、こういうものをその、設ける理由を言えば

(16')のような表現は受容主体にとって分かりにくいだけでなく、表現主体にとっても表現しづらいものである。講義のような話しことばで〈自問表現〉が使われやすいのは、名詞句で表現すればこのように言うしかないような事柄について説明・解説しなければならないにも関わらず、そのような名詞句表現そのままでは表現主体・受容主体ともに負担がかかり伝達が円滑に行われない可能性があるという事態に対処するための配慮と考えられる⁽¹⁷⁾。

もう一つ、疑問表現では疑問詞によって内容のありかを漠然と指し示すことができるのに対して、名詞句ではそれをより分析的に表現しなければならないことが多いということもある。

- (17) このプロシアのその、地に、できるのが、その、ドイツ騎士団国家です。で、これはどういう形でその、できるか、たとえば、その、
{ドイツ騎士団ってというような存在は、いわゆるその騎士修道会なんですけれども、その、ま、テンプル騎士団とか、あるいはその、
**〔聞き取れず〕騎士団、そういうふうなその、宗教騎士団、これがその、十字軍の際にできてきますけれども、そうしたその、宗教騎士団のその、一つなんですねえ。…(略)…}。【講B】

- (17') このプロシアのその、地に、できるのが、その、ドイツ騎士団国家です。で、これができる経緯は、たとえば、その、{ドイツ騎士団ってというような存在は、いわゆるその騎士修道会なんですけれども、その、ま、テンプル騎士団とか、あるいはその、**騎士団、そういうふうなその、宗教騎士団、これがその、十字軍の際にでき

てきますけれども、そうしたその、宗教騎士団のその、一つなんです
すねえ… (略) …}.

「どういう形で……か」に対応する名詞句で使われる名詞として「形式、方法、手段、過程、経緯、歴史、理由」などが考えられるが、表現主体は
その中から文脈上もっとも適切なものを選ばなければならない。名詞句の
複雑さの場合と同様、表現主体にとっては、漠然と指し示すことができる
ほうが表現上の負担は少ないことから講義などで使われやすいのではない
かと考えられる。

また、独立した文で題目提示をすることによって疑問表現は複数の文を
説明の表現とすることができるが、名詞句では複数の文を説明の表現とす
ることは難しい。(18)では、〈自問表現〉に対する答えの表現は段落をま
たがり9文にも及ぶ。名詞句だけではここまで長大な「説明」を導くこと
は難しいだろう。

(18) それでは、イシュミアルはどうこの空白を埋めるのであろうか。

彼は作品前半でのクイーケッグとの交遊において、この食人種
の蛮人にキリスト教徒以上の徳を見出だす。… (略) …何とか近代
人の失われた秩序の空白を埋めていくかに見えるのである}。【論
C】

こうした、〈自問表現〉が談話のテーマを提示し、残りの部分がそれ
に対する答えの表現として展開していくというあり方は、永野 (1968) にお
いて、説明文・解説文に多用される「課題・解答方式」と名づけられてい
る (pp.122-123)。講義は話しことばにおける説明文・解説文と言っても
よい言語表現であり、したがってこうした表現がなじむのは当然のことと
考えられる。

最後に、疑問表現を用いることによる働きかけの効果についてもふれて

おきたい。

- (19) で、話はもどるんですけど、そうすと、さっきのfドットドット
トっていうのは、いくつになると思いますか？ {90, とは限らな
いんですよ}。【講A】

- (19') で、話はもどるんですけど、さっきのfドットドットトっていう
のは、90になる、とは限らないんですよ。

(19)と(19')を比べると、受容主体に伝わる情報の上では違いがないが、働きかけの効果という面では大きな違いがある。「いくつになると思いますか？」という問いを投げかけられた受容主体は「いくつになるのだろうか？」と自問自答してしまうだろう。そのようにして表現主体は、受容主体を当の言語表現の中に引き込む効果を期待していると考えられる。

ただし、こうした働きかけの効果はすべての〈自問表現〉に見られるわけではない。疑問表現が文として独立している場合は働きかけの効果が強く、従属節の中に疑問表現がおさまっている場合には働きかけの効果が弱い、ほとんどないと考えられる。

以上をまとめると、「説明要求」の〈自問表現〉において疑問表現を用いるメリットとして、題目を文として構成することができるので名詞句の場合のように複雑な構造になりにくい、疑問詞による漠然とした題目提示が可能、また、答えとして複数の文を持つことができる、さらに独立文形式のものに限っては働きかけの効果が狙える、ということが指摘できる。

3.2.2 「判定要求」の場合

「Aである (ではない)」と比較する。

- (20) 「Y君の英語のテストの成績は、中間テストでは5点、期末テス

トでは6点であった。期末のほうが良い成績といえるであろうか？」／クラスの中での相対的な成績，という観点からは，上の問に対する答えはNoである。【論A】

(20') … (略) …クラスの中での相対的な成績，という観点からは期末のほうが良い成績ではない。

まず，疑問表現を用いた(20)のほうが「期末のほうが成績が良くない」ということが強調される。わざわざ疑問表現をはさむことで，この箇所に注目がいくとためと考えられる。

「成績が良い」という肯定形で尋ね，答えがその逆の否定形であることも強調の効果を高めている。問いと答えとの対応関係に注目すると，このように肯定・否定が反転する関係にあるものがほとんどである（今回の調査ではすべて反転関係であった）。

(21) で，しかし，5人でその，やるかって言えば {そうではなくて}，この，騎士団というのはその，騎士団員はその，5人ですけれども 【講B】

(22) では，私は，私の人生が何のために在るかを全く決定し得ないし，また決定していないであろうか。……これらはでたらめであったり，また嘘であったりするのだろうか。 {決してそうではない}。 【論D】

(23) 構造主義は「反人間的」なのか？ 【論E：節見出し】

(23)の答えは「構造主義くらい人間に理解を示した思想は，これまでにないんじゃないか」であるから，(21)(22)と同様に〈自問表現〉の問いか

けとは逆の答えになっている。このように、〈自問表現〉の表現とその答えとが反転関係にあるために、「Aである（ではない）」という結論の判断が鮮明に印象づけられるのだと考えられる。

ところで、ある判断が強調されて述べられると、なぜそのような判断になるのかについての説明が必要となる場合が多い。たとえば用例の(20)(22)はいずれも、答えの表現に加えて、その根拠や理由が示されて初めて完結した叙述になると言えるだろう。見出しである(23)ではなおさらのことである。このように、根拠や理由を導くという点に注目すれば、「判定要求」の〈自問表現〉も「説明要求」のものと同じく全体として説明・解説の表現を構成していると言え、したがって講義や論文といったジャンルになじむ表現であると考えられる。

このほか、「説明要求」の場合と同じように、独立文の「判定要求」の〈自問表現〉も受容主体への働きかけの効果が見られる。たとえば(20)と(20')とを比べると、(20)では「良い成績だろうか？」と受容主体は自問自答するだろうが、(20')ではそういうことはない。

以上をまとめると、「判定要求」の〈自問表現〉で疑問表現を用いる理由として、答えの表現を強調するということ、さらには「Aである（ではない）」という判断を強調することによってその根拠や理由などの記述を誘い全体として説明・解説の表現を構成するということが指摘できる。また、独立文形式のものに限っては「説明要求」の場合と同様、働きかけの効果を持っていると考えられる。

4 まとめ

以上、〈自問表現〉がどのような性格を持つ表現なのかということについて考察した。要点は次のとおりである。

- ① 〈自問表現〉は、典型的な疑問表現と比べると、表現主体が疑問を抱かず、しかも自分で答える、という特徴を持っている。
- ② 〈自問表現〉は講義、および論文の一部でよく使われる。

- ③ 「説明要求」の〈自問表現〉は答えの表現と合わせて「x (と) はy である」という「題目提示」—「説明」関係を構成している。そのため、講義や論文のような一方的な伝達形態の言語表現になじみやすいと考えられる。
- ④ 「説明要求」の〈自問表現〉において疑問表現を用いるメリットとして、題目を文として提示することができるので名詞句の場合のように複雑な構造になりにくい、疑問詞による漠然とした題目提示が可能、また、答えとして複数の文を持つことができる、さらに独立文形式のものに限っては働きかけの効果が狙える、ということが指摘できる。
- ⑤ 「判定要求」の〈自問表現〉は答えの表現と合わせて全体で「Aである (ではない)」(Aは命題・事柄・事態など) という表現を構成している。
- ⑥ 「判定要求」の〈自問表現〉では、「Aである (ではない)」を強く印象づけるために疑問表現が用いられていると考えられる。「Aである (ではない)」が強調されるとその根拠・理由が求められる場合が多く、その結果、「判定要求」の〈自問表現〉は説明・解説の表現を構成することになる。その点で「説明要求」の〈自問表現〉と同じく、一方的な伝達形態の言語表現になじみやすいと考えられる。

ジャンルの文体の指標という観点から見ると、「説明要求」の〈自問表現〉も「判定要求」の〈自問表現〉も、結果的に、説明・解説の表現を構成するという点では差がない⁽¹⁸⁾。実際、「説明要求」「判定要求」の分布を調査してもジャンルごとの違いはとくに見られなかった。

一方、働きかけの有無という観点から「独立文」「従属節」の分布を比較すると、論文ではほとんどが「独立文」であるのに対して、講義以下のジャンルではほとんどが「従属節」であるという傾向が見られる。受容主体の反応を目で見ることのできる講義よりも、見ることのできない論文の方が受容主体に働きかけて談話に引き込む働きをする表現を多用するとい

うことのようにあるが、これについては、受容主体に働きかける効果を持つと考えられるほかの表現⁽¹⁹⁾についても調査し、講義・論文のジャンル面での一般的な対立点と考えられるのかどうかを検討する必要がある。

また、説明を主たる目的とし、一方的伝達形態に近いという点で講義・論文と共通する性格を持っていると考えられるインタビューや討論といった言語表現においてなぜ講義ほどには〈自問表現〉が使われないのかについても、話しことばにおける説明的言語表現のジャンルという観点から、複数の指標によって考察する必要がある。以上2点を今後の課題としたい。

注

- (1) このような方法でジャンルの文体を考察した研究として、樺島（1963）、小宮（1986）が挙げられる。
- (2) 本稿で扱う言語表現は、音声を媒体とするもの（話しことば）と文字を媒体とするもの（書きことば）の両方である。以下では話しことばのうち表現主体と受容主体が固定しているものを「独話」、表現主体と受容主体が交替するものを「会話」、書きことばはまとめて「文章」と呼ぶ。また、媒体や主体の関係を問題にしない場合はこれらをまとめて「談話」と呼ぶ。
- (3) 国語研（1963）および本稿の調査参照。
- (4) 下線箇所が「自問自答の疑問表現」、{ } 内がそれに対する答えである。前後の文脈説明が必要な場合は[]内に要約して示す。話しことばにおける身振りなどの説明は〔 〕に、書きことばにおける段落の区切り箇所は／で示す。
【 】内は用例の出典（略称）である。くわしくは、注(9)および表6 (p.21)を参照。出典のないものは作例である。
- (5) 「クイズ質問」とは、「新聞のふたつ折りした部分にある数字は何？」（正解は「輪転機の番号」）のように、表現主体があらかじめ答えを知っているにもかかわらず受容主体に対して問いを発するものである（小針(1995), p.1）。小針はこれと「テスト質問」（「大化の改新が起こったのは何年？」）のような、教師が生徒に対して行う表現）とを区別しており、その理由として、前者が単に相手に質問の答えを言わせるだけのものであるのに対して、後者は相手が答えを知っているかどうかを表現主体が確認するためのものであるからだ述べている（同, p.9）。こうしたもののほか、たとえばインタビュー番組において、自分はもう知っている事柄でも知らないかのように装ってホストがゲストに質

問し、ゲストの発言を促すというような場合の疑問表現も(c)に含まれる。

- (6) たとえば「あれ、今日は何曜日だっけ? [少し考えてから] ああそうか、水曜日だったな」というような表現（ほかの言語主体に向けてではなく自分に向けて発せられた場合）。
- (7) 本来の意味での自問自答と紛らわしいので、以下、「自問自答形式の疑問表現」を〈自問表現〉と呼ぶことにする。
- (8) (a)典型的な疑問表現を中心とした研究の代表的なものとして、宮地（1979）、古座（1984）、南（1985）、山口（1990）、仁田（1991）、井島（1995）等が挙げられる。(c)に関しては「クイズ質問」に注目したものとして小針（1995）がある。
- (9) これらのジャンルの定義は表5（p.20）を参照。これらを選んだ理由は、言語表現としての成り立ち方がバラエティに富んでいたこと、筆者が現実の生活で触れる機会の多いものであったこと、そして資料が採集しやすかったことである。

また、具体的な資料は表6（p.21）のとおりである。講A・講Bは資料採集時のとりきめにより匿名とした。論A・論Bは、講A・講Bのそれぞれの講師による著作（ただし共著）なので、同様に匿名とした。

本稿ではこれらの資料における〈自問表現〉の全用例（138例）について調査した。

- (10) 討Aで1名だけ〈自問表現〉の出現頻度が突出しているが、一発話あたりの平均文字数がほかの参加者と変わらないことから、個人的な特性ではないかと考えられる。
- (11) 一般に、疑問表現の問い方と答えの表現とが対応しないことは、とくに会話においてはよくあるが、〈自問表現〉に関しては疑問表現と答えの表現が対応している場合がほとんどである。
- (12) 以下それぞれ「説明要求」「判定要求」と略す。このほか「選択要求の疑問表現」（「Aか、それともBか?」と問うもの）を別に立てる立場もある（阪倉（1975））が、本稿ではこれを「判定要求の疑問表現」に含める。答えが「AかBか」を尋ねることと「Yes か No か」を尋ねることとの間にそれほど大きな違いが見出だせないからである（いずれにしても今回の調査ではこのタイプのものは拾うことができなかったので本稿では扱っていない）。
- (13) 以下、パーセントは小数点第2位以下切り捨て。
- (14) 「ナニ」は、述語を構成する場合（「～とはナニか」）と格成分を構成する場合（「ナニ+格助詞～か」）とを分けた。いずれの「ナニ」にも「ドウイウコ

ト」が含まれている。また、「ナゼ」には「ドウシテ」が含まれている。「その他」の疑問詞は「イクツ」(2例)「イツ・ダレガ」(1例)である。「ドウ」については後述する。

- (15) 「ドウイウコト」(「ナニ」と同じと判断)、「ドウシテ」(「ナゼ」と同じと判断)は「ドウ」に含まれていない。ここでは「ドウイウ(ドンナ)+名詞+格助詞～か」(11例)という類型を挙げる。ほかに「ドウ～か」(10例)、「ドウイウフウナ～か」(5例)、「ドノヨウニ～か」(4例)、「～はドウなっているか」(2例)がある。
- (16) 本稿で「題目提示の表現」と呼ぶものは、佐久間(1987)の「提題表現」と同じものと考えられる。したがって、以下「提題表現」と言い換えてもよいのだが、表現(「題目提示の表現」)を指して言う場合と機能(「題目提示」)を指して言う場合どちらにも共通して使える用語として「題目提示」のほうが分かりやすいと考え、こちらの用語に統一することにする
- (17) 名詞一語で題目提示が済むところで〈自問表現〉が使われると、ときに「くどい表現」と感じられるのもそのためだと考えられる。
- (18) ただし、表現の構成の仕方やそこに至るプロセスがそれぞれ異なっているのは本論で考察したとおりである。
- (19) 呼びかけの表現(「皆さん」)、命令・指示表現(「～する場面を想像してみてください」)といった表現などが考えられる。

表5 対象としたジャンル

雑 談	2名の参加者（親しい友人どうし）が、話題にこだわらず打ち解けた雰囲気ですぐに対等に発言をかわすもので、情報や意見などの交換を通して共感を求め、得ることが目的であると考えられる種類の言語表現。
インタビュー	1名のインタビューされる人物（話し手）と1名のインタビューする人物（聞き手）によって成立する。インタビュー内容は書籍で出版されたりラジオ・テレビで放送されたりするので、参加者はそのつもりで話し、聞いている。決められた時間内で、あらかじめある程度決められた話題について、やや改まった雰囲気で行われる。会話は主として聞き手が質問し、話し手が答えるという形で行われるので発言の交替は対等ではない。話し手の持つ情報（多くは話し手自身のこと）を引き出すことがインタビューの目的である。
討 論	1名の司会と、数名の討論者によって成立する。専門的な話題について、決められた時間内でかなりしぼられたテーマについて参加者それぞれの意見を主張しあう。改まった雰囲気で行われ、参加者はある程度の準備を前もってしている。聴衆の前で行われたり放送されたりすることが前提となっている。参加者がテーマに関する意見を主張しあい、テーマとなっている問題の論点を明らかにするのが討論の目的である。
講 義	1名の講師が、多数（100人程度）の受講者を対象にして、専門的な内容について決められた時間内で一方的に知識の伝達を行うもので、実際に教室で行われているもの。講師がテキストや論文などを読み上げるのではなく、ノートを見ながら、あるいは前もっての準備に基づいて講義の場で具体的なことばを紡ぎだしている。プリントや板書、OHPなどの補助教材・補助教具も適宜用いているが、講師のことばが主となっている。
論 文	専門的な内容について、一般の読者に向けて分かりやすく解説した文章。学術論文ではない。

表6 資料一 覧

ジャンル	名称	略称	内 容
雑 談	A	雑A	20代男性2名（親しい友人どうし）による雑談（1996年6月）.
	B	雑B	50代女性2名（親しい友人どうし）による雑談（1996年6月）.
インタビュー	A	イA	60代会社社長（男性）への取材インタビュー．聞き手は40代ジャーナリスト（男性）（1988年9月）.
	B	イB	40代女優への雑誌記事用インタビュー．聞き手は出版社編集スタッフ（女性，40代）（1995年5月）.
討 論	A	討A	「憲法から考える21世紀の日本」（NHK 教育テレビ・未来潮流）．西部邁・江橋崇・橋爪大三郎氏の討論（1996年5月4日）.
	B	討B	「サリン！ 組織テロ！ 市民社会をどう守る」（NHK 総合テレビ・日曜討論）．佐々淳行・常石敬一・加藤博・渡辺脩・オリバー＝レベル氏の討論（1995年4月9日）．ただしレベル氏の発言のみ英語のため除く．
講 義	A	講A	統計学の講義（1996年6月）.
	B	講B	歴史学の講義（1996年6月）.
	C	講C	英米文学の講義（1995年10月）.
論 文	A	論A	統計学の解説書の一部（1992年）.
	B	論B	歴史学の解説書の一部（1980年）.
	C	論C	池田孝一「メルヴィルを読む」大橋吉之輔編『アメリカ文学読本』有斐閣 1982, pp.19-37
	D	論D	樫山欽四郎「一 問題」『哲学概説』創文社 1964, pp.30-55.
	E	論E	橋爪大三郎「『構造主義』とはなにか」『はじめての構造主義』講談社 1988, pp.11-30

参考文献

- 井島正博（1995）「疑問文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』30
- 樺島忠夫（1968）「ジャンルの文体特性」森岡健二ほか（編）『作文講座4 文章の理論』明治書院
- 国立国語研究所（1963）『話しことばの文型(2)——独話資料による研究』秀英出版
- 古座暁子（1984）「たずねる文」『教育国語』79
- 小針浩樹（1995）「質問文の機能の考察——クイズ質問を中心に」『文芸研究』（日本文芸研究会）138
- 小宮千鶴子（1985）「文章の種類と言語的性格」『文体論研究』32
- 阪倉篤義（1975）『文章と表現』角川書店
- 佐久間まゆみ（1987）「「文段」認定の一基準(I)——提題表現の統括」『文芸言語研究・言語篇』（筑波大学文芸言語学系）11
- 永野賢（1968）「文章の分類論」森岡健二ほか（編）『作文講座4 文章の理論』明治書院
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 南不二男（1985）「質問文の構造」水谷静夫（編）『朝倉日本語新講座4 文法と意味2』朝倉書店
- 宮地裕（1979）『新版文論』明治書院
- 宮地裕（1980）「疑問表現」国語学会（編）『国語学大辞典』東京堂出版
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院